

「日本初の動力飛行をした飛行機のプロペラ」を 新たに重要航空遺産として認定しました

(財) 日本航空協会 航空遺産継承基金事務局

当協会では、歴史的文化的に価値の高い航空遺産を「重要航空遺産」として認定し、その意義を広く社会に知らしめるとともに、後世に遺していくため「重要航空遺産認定制度」を2007年に設立いたしました。

2008年には、国立科学博物館が所有する「YS-11輸送機量産初号機」および埼玉県が所有する「九一式戦闘機」を初の「重要航空遺産」として認定いたしました。2009年は東京都立産業技術高等専門学校の所有する「戦後航空再開時の国産航空機群」を認定いたしました。

航空100年を迎えた2010年、当協会の航空遺産継承基金の専門委員会において、重要航空遺産に相応しいものを慎重に選考しました結果、国立科学博物館の所蔵・展示する「日本初の動力飛行をした飛行機のプロペラ」(ハンス・グラデー1910年型とアンリ・ファルマン1910年型に装備されたプロペラ)を新たに重要航空遺産として認定しました。認定理由は以下の通りです。

「日本での飛行機による初の動力飛行は、陸軍代々木練兵場において1910年(明治43)12月11日から20日までの間に実施された。ドイツ



ハンス・グラデー1910年型のプロペラ(左) とアンリ・ファルマン1910年型のプロペラ(右)



右から徳川豪英氏、日本航空協会・近藤秋男会長、国立科学博物館・近藤信司館長、日野虎雄氏。



ハンス・グラデー1910年型



アンリ・ファルマン1910年型

から輸入されたハンス・グラデー1910年型とフランスから輸入されたアンリ・ファルマン1910年型が使用され、12月14日には日野大尉のグラデー機が飛行に成功し、19日に徳川大尉のファルマン機も飛行に成功した。両機の飛行は、日本の航空史における原点ともいえるべき出来事である。

国立科学博物館の所蔵する両機のプロペラは、その飛行機に装着され初飛行時にも使用された可能性があり、今日でも製作・使用された当時に近い状態を保持している。また、日本の航空創始期のプロペラの現存数も少ない。これらのことから、国立科学博物館の『日本初の動力飛行をした飛行機のプロペラ』はきわめて重要な航空遺産といえる。」

当協会のホームページに掲載した解説も合わせてご覧いただければ幸いです。(http://www.aero.or.jp/isan/heritage/aviation-heritage-grade_and_Farman_propellers-detail.htm)

重要航空遺産の認定証贈呈式は2010年12月19日午後1時30分から、国立科学博物館日本館2階大講堂で行われ、当協会の近藤秋男会長から国立科学博物館の近藤信司館長に記念プレートとともに認定証が手渡されました。贈呈式後に日野熊蔵氏のご子息である日野虎雄氏と徳川好敏氏のご子息である徳川豪英氏とともに記念撮影が行われ、続いて「航空100周年記念シンポジウム 日本の空を拓いた日野熊蔵・徳川好敏大尉から100年」(主催・国立科学博物館、日本経済新聞、共催・日本航空協会など)が開催されました。